重修真書太閤記　四編　六

へ13
459
36

重修真書太閤記四編巻之拾六

日根野兄弟相談の事

并信長信忠江北働の事

竹中半兵衛重治ハ木下藤吉郎と相談して日根野兄弟を激し淺井の方にあつても軍に出ざる様に説ばやとおもひ窶々しき体にてひそかに日根野が宿所にたづね行故主に忠義を竭さんとおもはゞいかくにあふ共他人の禄をたやすく食すべきにあらねど我身のことよりして大形に語り出し鵞眼百疋を借て立帰りしかば備中守と彌次右衛門と顔

消印 福系 門 號 459 冊 36 同攷會印

見合竹中がふるまひかねておもひしと大に相違したる事のあやしさ然ハ齋藤代々の縁を忘もぞの血脉の永く絶ざらん事を祈る真實の忠義と云べしそれにならべて如何なれバ國を一所に立退ながら我々兄弟主の意に引違ひ別もしくさなりしと義龍道三の幽魂草の蔭にて嬉しとハおもひぬる然らバそれのみならバ或ハ江州の佐々木に身を寄又ハ叛逆無道の三好に扶持をうけあるひハ朝倉あるひハ淺井と身を萍のよるべ定めぬありつきおそろづうしけし林にすむ鳥の梢をえらび淵にかくるゝ魚の浪を潜る心なきものと見なさ

へ身を置事をも知ものを今まで心のつかざりしぞ淺猿かりける次弟なる心をしづめて此ごろの大名衆の上を思ふに佐々木六角殿といふも前将軍家の御恩にて北陸道の管領職に補をられたまひしなれバ前将軍御事ありしその時弟一番に今の将軍家を助けまいらを謀反のものを誅伐あるべきにさんなくて結句失ひ奉らんと謀をしハ冥加の程も恐ろしそその六角にあてしなかりども身を寄しと悔てもかひなきも口惜や三好がとハ言の葉にかくるも今更なちがまし君を弑せし大罪人と一日なりとも袂をかわし袖を川らねし當時の心そ

おのや何ごとぞ朝倉義景ハ本性おぶくして武将の器量なしとおもひながら齋藤殿を扶助しまへどあれハ遁れぬ由緒もあり淺井殿と我等とハむかし弓矢の遺恨もありそれをわすれてたちまちにあらしをたゞ一日の命おしさに武士の道に迷ひし振舞と竹中にさげすまれんその殘念やかくて淺井の爲に忠を盡しその恩に報ぜんとせバ何處までも身を亡ぼさん電光石火の世の間に經ふとバめ緣てもろなしと知れハかゝる身の行ひ千度百度おのみともおのれへバまさしくちかうしやいかにさましと兄弟ハ額を合せくり返しうるさ行衞なき

を合げるが備中守やげるハ誤てらく竹中ハ齋藤を捨しと人におもはれながら真實齋藤を守護する深意ありその上木下織田の扶助を受ぬ意のいさぎよさ我等ハ齋藤とこのに存亡を同じくせんといひし言葉の末もあそびに終に別れてかゝる体たらく龍輿を捨殺さしとおみどりをそれとおのれでこの頃我等兄弟などの侍ハ多く得がたき忠義心名譽のものとおもひけるこりしハ何事ぞ竹中が詞なるそらうしあれ御身ハ何とおのれぞと問バ弟の彌次右衛門仰の如く我々が只今までの所業をすべて真の道なしではとの道理を知ぬなどのものともおを

おごりしがいかなる天魔のたぶらかしけるにや熟〻おもふに浅井の家も終に信長に亡さるべしその故いかにとなれば久政勇なく智なくしかも侍を軽んじて己を高しとし父亮政のそのむかしは忘も旧好の士を疎ぞ江北の歴〻いづれも心服せざればねけくに旗下を離れんことを計る堀礒野宮部伊黒の輩を見ならふべし長政勇なれども道理に暗く侍を愛すれどもうち任さく用ふることをしらず始終江北を全く領すべき人とおもはれぞ我等この人を頼みし本意武衛の家名をおこし龍興の身上を世に出さんと思ふが故なれども久政長政がくの如くなれば何とて思ひを果すべき朝倉義景もかくの如く惰弱にして頼もしからざれども國ひろく軍兵多しその上雪ふかければ冬のうち心安し今まぞし我々も越前へ引かへし斎藤と一所にならんやとおもふにいかにひさんやといへば備中守何さま浅井もたのもしからず深きゆゑあるもなき人と共に身を果さんことを返すがへすも残念なることなれば早く退去をなすべし日数ふるうちにいかなる故障の出来らんもはかりがたしといへば彌次右衛門仰はさることながらさのこあそて立退くも及ばず此度は心をしづめて能々了見しさてのち

に出立をなしつゝやそれに付てかゝる由ありけれバ浅井家より贈る所の扶助を返し我等が貯へし處を以て朝暮の用にあてそれ盡たらんまでも急用ならぬ器用を賣て凌ぎつゝ龍興の身を寄てたのみしかば大将を尋ねそのうち越前へ立越ろし龍興を誘引あるべく存ば只今急くに越前へ趣き行べきさおてもなされ武衛を伴ひ出し何となるべきやまさ朝倉の家に思慮あるものなしとも云ふべからねば去バ我々再度越前へ趣きなバられ必龍興を連出さんためには帰りしのなりんと推量され容易く出國かなふまじきぞしの間ならぬバとかく浅井の

恩を受ざる様に御計ひ然るべしと申けるによつ備中守も實にと思ひ浅井が贈る扶助を返したりしかども長政さらに心付ばその儘に捨置けるとそおろかなれ其後兄弟より龍興のもとへ越前に長く御座ればとも齋藤再興の便となるべき体にも見えねばまづ何をかたのみしき方へ御出國然るべしと勧めけるに彌次右衛門がかねし如く越前の老臣等の心に龍興なくて越前に居るうち日根野兄弟を始め齋藤家の武勇の浪人等朝倉を疎略なりつまじきおもひしと故龍興を馳走あつくめてなしなるべしと義景にそうめけるによつて義

景のごとく淫酒に長じ游興に耽る本性なれば龍
興と共にあけくれ酒酌かはしあそび戯をけるに
ぞ龍興もおほきに悦び匆々安堵のおもひをなし日根
野兄弟の申越しことを結句うるさしとおもひけるに
そかかるところに木下藤吉郎は日根野兄弟を
竹中に計らせしに重治もしも帰りがたくいはんとて
帰りたまはばなりや彼兄弟浅井がために力を竭を
まづ御心安かれと告しかばそのうちまかせ間者を
入て日根野兄弟の体を窺せしに浅井が贈る糧
料を返さし由を聞出しければ竹中が遊説まことに
その圖に中りしを密にこれを悦び此上は彼等を

味方に呼取べき一段なりと猶さまざま秘計を廻らし
けり爰に信長の嫡子勘九郎信忠岐阜に於て七月
十九日鎧着初の儀式ありけるに諸将その武者ぶ
りの優美なることを賞美しければ信長さらば信忠
が初陣に江北へ出馬し小谷表へ働くべしとて同
日岐阜を首途ありて同廿一日小谷に着陣雲雀山
虎御前山を本陣となされ先鋒はいつもかはらぬ
柴田修理進勝家佐久間右衛門尉信盛木下藤吉郎
秀吉丹羽五郎左衛門尉長秀蜂谷兵庫頭頼隆五人な
り此等の面々小谷の町へ寄るやいなや鉄炮を打か
け火箭をはなち在家をうち破り惣搆を乗取三の

丸まで押詰しかども淺井家の兵士ら川より返し
て音もきれとのもしくが持口を固めらうを破らせ
じとのえ構へたり織田家の兵士十分に城下を濫
妨し軍勢の威光を示して引退く木下かねてかの
ふ様かれどまでる責詰ば淺井家の侍ハ出ぞ共日
根野兄弟ハ急度打出んかのなるに影たるに見をね
いいぶうしきとのし小谷ハ長政居城なれバ日
根野兄弟なしらを守るふとの闕べきやとて外の
要害へ加勢に遣さらしめやし川ら去ばかならば
山本山なるべし一あてあてゝ見よやとて翌廿二
日木下が勢ぞろうはく山本山へ押寄てきもと責

ぞい城主阿閉淡路守城より外へ打て出木下勢と
戦ふたりされども阿閉あまりに小勢にて討出し
かば秀吉心に疑をおこし暫時ハ會釋して戦ひ
けるが加藤福島片桐堀尾さのこあしらふをかちて
と云ようてやく切崩さんとあしけるば阿閉が勢
ども突立られ忽ち亂まて敗走を淡路守士卒を勵
まし返をやかへせと下知されども引かうたる
敗軍の曲として一人もかへさら迯散たり木下が
手勢ハよく力を得勝にのりて従横十文字に駈な
やませハ阿閉淡路守ハうよかのへども力なく惣
崩となりされたち左右へそうとひらきけり木下

あるを見て此競に城を付入に乗取やと手をあげく責たりけるに城中より安養寺三郎左衛門一手の兵を従へて打て出横矢にかゝりて責たりしかバ木下勢安養寺を打てのち城を責んと面もふらズ切かゝるその間に阿閉淡路守敗軍をあつめて城中へ引入られバ安養寺三郎左衛門も同じく城に引返しけるを木下勢是非なく打入んとなしけれバ木下かたく制して長追をなす城中にいまだ新手の兵士あるとおぼゆるぞ其上要害もあしからねバ急に落し得べからず且今日ハ試の軍なり是を勝利に引取べしと首級六十四取持を本陣へ参上し

實撿に入しかバ信長大に感じ思召信忠の初陣に六十四級ハたのもしくと一入悦びせたまひけり翌日廿三日ハ木の本邉を放火しまひ地蔵堂をはじめ神社佛閣一宇も残さず灰燼となし草野谷の奥まで在家をことごく焼拂ひて岐阜へ凱陣なし給ふ

木の本地蔵堂ハ長祈山浄信寺といふ天武天皇白鳳三年の開基本尊ハ地蔵菩薩也今の堂ハ豊臣太閤建立なりと云木の本より小谷へ二里半といふ

朝倉義景大嶽に出張の事

并柴田木下淺井朝倉と合戰の事

信長ハ諸將に下知ありて所々に放火し濫妨なし給ふによりて淺井方の兵士軍威に恐れその日ハ過ぬるを武きなしとして手薄げなるの見へけるによりて久政長政よりかくと越前へ飛脚をもてしらせ信長當表へ出馬し在々處々を放火し濫妨せらるゝこと日々に増長せりとて早く出陣ありて加勢なし給ふべしと申送る事櫛の齒を引が如し義景これを聞て捨置べからずとて朝倉式部大輔景鏡に五千餘人をさし添先鋒と號して小谷表へ出張せしむ景鏡江北に着陣し長政に對面し義景なるも遠からば

出馬あるべしと申けるによりて長政も少しハ心を安んじけれども織田家の大軍敵しがたければ堅く守て打て出る事はなかりけり木下藤吉郎ハかねがね信長へ言上し虎御前山に一城を築き小谷の城を眼下に見おろしなば淺井家の兵氣次第に縮まり自然と滅亡に及ぶべしと勧めしかども虎御前山ハ小谷の真向にてさながら敵城と同前にてこれを守る事容易からずとて捨置給ひけるが今度の御出馬なれば幸ひなるも是非とも砦を築き給ふべしとさまざまに言上しけるによりて然ば早々用意をなすべしとて佐々内藏助福冨平左衞門兩人を普請

奉行となし人夫ハ江州にて味方に参りたる諸将に割りあてさせ同月廿七日鍬ぞめあり夜を日に継て急がせらる扨又右に付て朝倉浅井の輩妨げなさんハ必定なりけれバ是を防ぐ用意なくてハかなはじとて柴田勝家木下秀吉佐久間信盛丹羽長秀蜂谷頼隆の五人虎御前山と小谷との間に割入て陣を取浅井父子を押へしめ池田勝三郎内藤勝助塚本小大膳不破河内守を後陣として段々に陣を立られ

虎御前山ハ小谷城の向ふにあり小谷城との間三十町に近しといふ

扨また山本山の押へにハ丸毛兵庫頭市橋九郎右衛門水野下野守中川八郎右衛門等をさし置ある浅井長政是を見て虎御前山に城を築きて味方のせめに難義なるべし一合戦して是を妨げんやとおもへども義景いまだ出馬なし浅井勢ばかりにてハかなひ難くふたゝび越前へ脚力をたてせ厳重催促をなしけれバ義景も今ハ辞するに及ばずやうやくに用意をなし二万餘人を引率して越前を進發し江州に趣き柳瀬に着陣しそれより小谷へ出張し大岳の麓に陣を取

一乗谷より福井へ三里福井より府中鯖波を經へ

て栅瀬に至る十七里廿五町なり梁ヶ瀬より木
の本へ二里なり
信長は義景の着陣を見給ひ旗本を虎御前山の麓
にうつさしめ朝倉に向て備を立させ惣勢に下
知して一同に時の聲をあげさせけるが朝倉方に
てもおとらじと同じく鬨を合せける信長と義景
と正しく向ひあはせに陣をとりしと今日ぞ始し
信長旗本の諸侍に下知し給ひけるは敵はまだ備
を立固めざる以前に夜討朝掛して怖れしめよと
宣ひければ血氣壮の若殿原我もとすゝみ悦び勇
みその夜より夜ごとに敵陣をおびやかし首五川六

川取來りござるはなし朝倉勢はなはだ迷惑に及べ
どもいまだ陣營の修理おはらず備もかたく立ざ
れば如何はせんとぞ周章ば長政は義景の着陣に
氣を取直しつれども今四五日はやく出陣あらば
虎御前山の普請はとゞめさせじものをとはぶや
きなかりしとかもかくにも一合戰して普請の氣を
ぬかばやと評定し朝倉式部大輔景鏡と淺井長政
各三千餘人を引率して打て出織田方にては是を
見て柴田木下の兩勢備をとり出し戰をいどめは
信長聞食加勢として柴田が手へ稲葉伊豫守同右
京亮同彦六郎をさし向られ木下が手へは池田勝

三郎信輝をさし加えらる柴田稲葉の両勢朝倉に
まかう合て戦へバ木下池田ハ淺井に向ふて軍を
いとむ朝倉方山崎長門守三千餘人鉄炮少々打かけ
くるやいなやゆうとの若者ども鎗をとりて駈出
面をふらじと突合たり晴なる戦なれバいづれも名
を惜み義を重んじて一足もひかじひくなとちぢ
しめ合爰を専途と戦ふなり淺井長政ハ去年姉川
の軍の後度々戦負ける事なれバ今度ハ是非に信
長の旗本まで切入有無の一戦をとげんものをと
自身真先に進て味方をはげまし下知しけるによ
て三千餘人の兵士いづれも大将の心をさとる習ひ

なれバいとど劣らじと駈たりけるその勢ひさかんに獅
子奮迅の如くなれバ木下藤吉郎味方を制し死武
者の鋭氣をさけよと軍法にいひふらしなるぞと
ぢしひかへかくもやとて鉄炮の士を二行に立
てならべと打かけさせしかバ淺井勢打物おそれを
て戦ひをせバたゞ遠責に鉄炮を打かくるとの比
興さと呼わりくひかへたり木下池田これを見て
をそやかしもと下知をなしバ美濃尾張の壮者ども
鎗の穂さきをそろへて一同に猶豫ゐたる淺井勢
へ真一文字に突かゝる加藤福島片桐堀尾四角八面
に馳廻きバさしも勇ゝし淺井勢四度路になりて

見へたる中に紫糸の鎧に鹿の角の前立したる筋甲を着たる武者太く逞しき馬に打乗鎗を握て只一騎味方をとるも池田が勢の中へ切て入馬武者三騎切て落しおかりと拂く戦ふたり池田が郎等戸倉四郎兵衛なるを見てよい敵なりそれかのさしそといふよりちやく鎗を合せて突合ば池田が兵士五六人駈寄て四方より突かかる彼武者更にこともせばまちまち二人を突落し勢猛くもしを廻せば戸倉四郎兵衛かなわじのと引返し片桐助作これを見てあらのくしや何程のことかある是ささと鎗を合せて戦へども更に勝負は見へざりけ

る加藤虎之助福島市松なるか是を見付けのがさまじと追取まき打取んとせり合ば彼武者今はたまらずや馬を返して引退く加藤福島あまさじと追掛しかば長政もまた大勢を以て迎ひ合せ又亂軍となりけるが今日の合戦雙方に手負討死あまたあれども互におとらずやりしが死骸の上をのりこえのり越死生をわすれて戦ふなれど日もはや西にかたぶけば長政とても勝まじき軍なりとおもひひは切人数をまとめて退んとするに朝倉山崎は柴田稲葉と猶も戦ひたけるなれば長政使者を立て軍は明日なりと約束して相引になりて引たりけれ

然るに木下ハ先刻の紫糸の武者ぞ日根野兄弟の
うちなるべきとおもひしかバいろ／＼とこれを探り
求めけるに日根野兄弟ならであらバ淺井が手の浪
人武者に脇坂甚内といふものありしと告しかバ
秀吉大に安心しさてハいよ／＼日根野兄弟竹中に
説ふせられ淺井がために働かバさるべくも竹中
が智謀のほどこそおそろしけれ
脇坂甚内安治天文廿二年癸丑の生れ元亀三年
ハ廿歳なり父ハ外助安明江州北郡の人なり

重修真書太閤記四編巻之拾六 終

重修真書太閤記四編巻之拾七

齋藤龍興前波の妾に戀慕の事
并 前波吉繼齋藤龍興を討んと謀る事

信長御父子江北に出馬ありて小谷表を思ふ儘に
放火亂妨し剰小谷の向ひなる虎御前山に砦を築
んと普請を始めたまひしかバ淺井長政ハこらえ兼越
前へ加勢を請ける故朝倉左衛門督義景二万餘人
にて江州へ出馬し小谷大岳に着陣しけれバ長政
力を得去バ合戦を挑むべしとて朝倉式部大輔景
鏡を先鋒として織田家の柴田木下と戦ひしかども

勝負決せバ相引に引退く斯てハ敵の普請を妨ぐ
なことあるまじけれバ今一度有無の軍をなすべしと擬し
しかれども朝倉の兵士等進まざれバ一両日徒に白
眼あふてぞ居たりける織田家にてハ砦普請成就
する迄ハ此方より手出しすべからず陣々を堅く
守りて怠らざれと定められ普請奉行の面々ハ麓
に於て合戦あるとも更に顧ることなく一圖に請取
の役目を守り片時も早く急ぐべしと下知せらる
是に於て佐々内藏助福富平左衛門尉人夫等にも
其趣を申渡し晝夜の差別なく働かせけるにより幾
日も經ざるに大半成就なしたり尤木下が得たる

割普請の法を用ひし又淺井長政大に怒て義景の
本陣へ使を遣らし合戰の事を促しけるに朝倉義
景も同心し明日ハ両家の勢を合せ有無の一戰を
遂べしと返答あるにより長政もちとぞろう氣色
を取直し合戰の用意となしたりけるに八月八日
朝倉の陣中に不慮の騒動出來りて又合戰延引を
その故如何にといふに朝倉の家に前波九郎兵衛
吉繼と云ものあり越前一國の奉行職にて随一の
武士なりけり然るに前波が下役にて小身なるものゝ
娘名ハさみといひて容色美麗の女あり吉繼なをと
を懸想し其父ハ我下役せしかバ内々懇望して得

心の上妾となし最愛したりけるを此頃朝倉の許に客分にて寄食居ける齋藤右兵衛大夫龍興いつしか此さまを見そめ戀慕のおもひ頻なりしかバ酒宴の席にて義景に此事を語り出し強に所望しけれバ義景聞て御邊の心にさへ叶ひなバ我呼取て進ずべしと龍興を贔屓のあまり心易く請合けるにより龍興大に悦び斯事成就なしなば助命の恩と等しかるべしとぞ禮謝なしたりけり義景近習者を以てこれを穿鑿なしけるに前波九郎兵衛が下役の大野佐右衛門と申ものゝ娘なるよし聞えしかバ義景うち笑ひその女ハ大なる果報もの

かゝる濃州の太守齋藤龍興に見そめられしは氏なくて玉の輿とやいふべし今こそ龍興牢人にて此國にありといへども押付信長を打滅し元の如く本國に帰らしめん事遠からじその時ハ大野佐右衛門も美濃屋形の舅といはれん早く娘を龍興方へおくるべしと申付よと下知ありければ近習者佐右衛門を呼寄てその旨申渡しける時佐右衛門大に驚きいかにも迷惑の体なりしかバ何故神速に御受と申さゞるやと詰られけれども前波が妾に遣したりといはんもいかゞなれバ何と云てか遁るべきと進退ここに谷り上意の段誠に難有候へども男

女の縁邊ぞあらバ親の意にも任さるべし一まつ
娘へ申聞せ其上よて御請申上ゆそんと答へあれ
ば近習者おし返し殿の仰出されしとて左様の御
答あるべきや御請延引せば却て御咎めあるべし
早々娘に得心させ即刻差上申さるべしと急度申
渡しけるによつ佐右衛門大に狼狽し我家に帰り
息女に斯と告しかバ娘も驚き一旦吉継ぬしに見
えしのち又別人に逢べきや思ひもよらぬところな
といえとも佐右衛門を道理なれバ返さるべき辭な
く前波にこの事打出していそぎ利欲に迷ひて籠
奥に送らんと思ひ立しものならんと疑ぎんも口

惜し去とて有のまゝに告たらバ如何なる憂目に
遇んも計られぞと種々に心を苦しめけるが
まつ當座の難を遁れんと娘ハ頃俄に病におかゝ
されて打臥ゆへバ養生して全快のうち差上ゆそ
んと答へけれバ義景大に怒り憎き奴の云條や我
命を請しのち事によせて延引するハ奇怪之その
女病氣ならバ此方にて療治させん是非によし上
よと理不盡に申渡されしによつ佐右衛門ハそ
屆き様なく前波に云々の容子を語て宜しく計ら
ひなるべしと惣身に汗を流して申けれバ前波
もわらくのてあまし是ハおさゝに定まれる夫な

き故義景も加様のことをいたさるゝならん我近習者にたより我妾となしける由を餘所ながら言上させん左あらば累代の家臣の妾を近頃の牢人客にあたへよとするもいかゞなれどと思案しけるが竊にかくと告しかば義景はうけてたとひ前波が妾にもせよ我龍輿に約束したる女也いかでかとて早々龍輿に乗へ送りけるべし此後この車取なるそのものあらば同罪に申付べしと氣色替て申渡しけるより近習者大に恐れ前波にかくと申送り佐右衛門へも使を以て嚴重に申遣し娘を龍輿の許へ送るべしと定められしかば前波が遺恨骨髓に通

ま口惜や我等が所望とあらんに奥方の上臈たりともなどか許さゞらん知や是れは某が年來の妾なりしを牢人の龍輿が所望とて引きなしなしの理不盡さ主も即從を親しむよりて即從主を敬ふなれ今日の如くば家を失ひ國ば亡したる龍輿と普代相傳して命に替て身を捨んと契りし我等を思ひ易なる屋形の為に誰か忠義を竭すべきと既に一亂に及ばんとする其の曉江州陣の催促ありて前波も出陣なしけるが抑屋形と共に酒宴して淫樂を勸めしは龍輿なりされば龍輿は屋形の身持を惰弱にしたる張本人に江

州陣を幸に龍興を伐て我欝念を晴し且ハ主人の
眠を覺さばやと思ひ立つけれども誰か我と共に事
を謀るべきとおもひ回せしに冨田弥六郎増井甚内
毛谷猪之助の三人兼て前波と同志の者なりしか
ば彼等を招て密談しけるに日頃月頃龍興の振舞
を嫉居たりける上なれバ一義にも及ばず同意し
何にも此度江州の陣中にして討るこそ然るべけ
れと評定しけりそれまでハ隠密をなすべしと互に
心に示し合せ何氣なき体にて出陣せり然るに大
嶽の陣中にて誰云となく前波九郎兵衛龍興を怨
み此陣中にて暗打にせんと謀る由を風聞しけるに

ようをのがし義景の耳に入けれバ義景大に怒りて
龍興ハ吾と親ありし我龍興と共に語るになんぞ
これバ飲食ともまたのしかりしばその人をひそかに
害せんことを謀るといふも奇怪の振舞やたゞし
荒立ては騒動に及ぶべし何となくだまし寄てこ
れを誅すべしとて義景の近臣に鳥居兵庫高橋甚
三郎両人を呼寄前波が來ん時をまち見合せ討て
まゐらせよと下知せらるゝ此両人もとより前波と中あ
しけれバ思慮なく承引したりけり然るに池田隼
人と云もの如何にしてかこれを聞たりけん事の次第
を審に知て落もなく前波が方へ告けるにぞ前波

されバ大に憤りて君々たらずとも臣ハ臣たるべき理と思ふて國家の禍の根を絶んと謀りしものを誅せらるゝとハ何事ぞや十分の恥辱を蒙るのミならバ讒者の舌頭に枉死せんことの口惜さ早く秘策を催ふすべしとて即時に冨田毛谷増井を招きて相談に及びける

義景前波を誅せんと謀る事
并前波冨田等織田家へ降參の事

冨田毛谷増井の三人前波が招によりて早々に來集せしかバ九郎兵衛吉繼池田隼人が知らせるが趣を語りて我々が死生損亡此時なり如何すべしと

云けれバ増井甚内進ミ出事既に爰に至りてハ謀を計畧も其間なし早く織田家に降參ありて身命を全くすべし士ハ主を擇で仕へ蟹ハ甲に似せて穴をほるとかや屋形義景愚昧にして家來を視こと塵芥の如し忠臣を遠ざけ佞人を近づけ普代新參の別ちなく只其遊興の伽をよくしけるを尚ぶ大丈夫たらんものが酒宴淫樂の片手打にあしらはるゝことを誰か嬉しとおもふべき片時もはやく此陣を遁れ出なんやと勧めしかバ冨田毛谷の両人も此儀實に然るべし危急の只今何でかよろしき工夫のあるべきぞ三十六計逃るを専とせバ後までハそ

の詮あるべからずは今より降参の便宜を求め玉へと發言しけれバ九郎兵衛大に悦び我とくより此心ありしが御邊等が心底いかゞあらんとおもひ態と各の意見を尋ねしに符を合せたるが如し次に降参の便ハ濃州鵜沼の大澤二郎左衛門と某舊き好あり是にたよりて事を計るべしと存付先達てその安否を尋ねしに木下が組として小谷押えの陣にありと聞因て既に一書を贈りて有增を語ひ置たり抑この大澤が織田家へ降参のはじめ木下が厚恩にあづかりしとて戰場の供にハいつも木下が陣に組合せて出るとかや大澤よく取持て木下

にもしめぢ木下こそと異議あるまじきと語ふ処へ彼使ろしぞ帰りきたりしが大澤殿の陣に至りしに大澤殿件の書簡を手に取某を同道して木下の陣にいたられバ木下大澤が持たる書簡を手に取てくり返し〳〵讀終り何様この書簡の趣にてハ偽の降参にてあるべからず本心と知れたり斯く返事をあたへやと下知せられけるにより大澤殿直に返書を認めらるゝをあちこちふハとて出したる九郎兵衛披てこれを讀に事急なり早く大澤が陣へ来りたまへ大将の御前へハ力を盡して取扱ふべしとぞ書たりけるを四人一所によりあつまりめ

に首尾はをなちちこれ逆を去て順に従ふ開運のはじめなりと悦ぶ処へ義景の本陣より前波九郎兵衛に評定をなすべき一大事あり只今罷越ゆべしとゆて呼をたり是は信長と一戦の期にあたり前波ひそかに龍興を害せんと謀るまどきにもあらねば彼を誅して後安く戦をいどまんとの意なりと鳥居兵庫高橋甚三郎が謀て用意をしてなかりをし誤て打損ずる事のやとて力者数十人を擇ミ出し本陣の帷幕の蔭にかくし置前波を一番に呼入れ這入処を斬べしと支度し冨田毛谷増井の三人をばおのおのひそかに打棄よと手筈を定めてそのゝち使

と立しなり前波が方にも兼てよりおのが設しをなれば心中大に怒をどもさあらぬ様にもてなして御諚の趣かしこまる追付参上仕るべしと返答してまづ使をば返しそのち偖大澤が返書にあるがむ只今退去せる我々なり何の遠慮かはべきさの使の首切て土産にせんと冨田増井が立あがるを毛谷いとどめていやいや我等この陣を忍び出るをも追れ大事なりかの彼一人を殺したりとも何の益かあるべきぞ早く退んとその支度をなしけるが四人一所に立出て却てあやしまるべしとて前波九郎兵衛吉繼池田がもとへ此由を告て八月

八日の暮かたに手勢引具しゆる〳〵と陣所を出て
馬を馳れハ冨田毛谷増井の三人も各手勢を引つ
れて陣所を出馬をなして木下が陣所へ乘し込
義景さらにかれをしらバ前波を呼しにやがてと
云て使を返しおけども出ざりしバおもはざる不思
議と二度使を立川までをしを返て前波が陣にハ
人影もなし如何なる故うと注進ハ折しも陣門の
番の兵士本陣へ來り前波九郎兵衛手勢を引連屋
形の仰と称しつゝ柵門の外へ出たりしが續いて
冨田毛谷増井の三人おなじく手勢を召具し明日
の軍の伏兵の為に出るよし申断て出てハと告け

されハ義景聞て大に驚き手延ありて取逃せしをの
殘念さ四人とも織田家の陣へかけ入しと覺へた
る去にても何してか本陣にして某が密に議ありし
ことを知りるにやさされハ何様本陣のうちに彼等と
一味のもの有ならん計あるべきされハ此世の中の
人おぐろとハ云彼等四人敵陣に駈入たる上ハ此
程の味方の軍法おちもなく織田の陣にて知べけ
れバ今度の合戦もなくしうらバ引返さむやと例
の臆病神に誘引ける処へ又陣門の番兵ありて來
り池田隼人柵門の外へ出ハ故何故に出ハ哉と尋ゆるに
その答分明ならざれバ故止め置ぐハとやそ〳〵

義景その池田召連來と下知あるにより間もなく隼人を縛め捕來るこの隼人ハ前波が知させによりて陣中を退んとせしが已に時刻の遅かりし故かく咎められて虜たり義景池田を見て汝普代相傳の主を捨敵に降る叛逆心天も是を許したまはんや忽ちその縛めを受たるハ逆意の次弟包かくれなきをとありし時隼人答へて殿にも普代相傳の主恩と云ことを知食るゝや然バ何とて前々代よりして重く受たまひし将軍家の御恩をバ忽緒になしたまひしやらん普天の下王土にあらざるハなし越前を押領して何や朝廷を等閑になさるゝぞ今度の合戦をなく

淺井が誤にて信長の軍正路にかなはで千に一も勝せ給ふべきにあらざれバ因て某敵陣へ參り降參の由を申入そのうち此方の御軍法をよきほどに申通し侍らん時に定めて信じ給ふべし元より偽て知らせし処なれバ真の御軍法の障になるべき筈もなし無益の処へ軍兵を引分させたらばせめて味方の御為に一術と存じて罷出んと仕りしが如斯に捕られし事是又此軍に勝べきなる瑞相と覺へ候といへバ義景なほもますます怒て終に首を撃落せんとされども弥氣味よく引返させやとに思ひ立しなり前波九郎兵衛吉継ハ大澤の陣にてして我等を今日誅さんと定めしより承り忠にもあらじバ

義なもなく犬死せんとの残念され御陣をたのミ参上仕る但某同罪とて勘気を受冨田彌六郎増井甚内毛谷猪之助と申者も追付駈込ミ候はんが何様にも然るべく頼ミ入ると一事不残ゆるしろバ大澤二郎左衛門ヶ様心安くおもひあるべし木下兼て越前の大小事を探り知御邊を龍興の件らしく知て追付此方へ来るべしと内々申談ぜし処へ貴邊の書簡を贈られたりされバ木下さもあらんと書簡もいまだ披らぬに容子詳に知たる故なれバなほさらに斯もたのむハ命をたすくる縁なしと神速も納得ありつるなり姑木下に對面あるまじとて立上る処へ冨田毛谷増井の三人くを来り前波を尋ねて降参のよしと言入けれバかれ等とも同道して来れバ秀吉に見参し秀吉

四人に對面し實に危かりし時節をよくも服をあはしと面々の高運といふべし當手にありて忠節を竭されなバ一廉立身あるべきことなり大将に見参のことを取計ふべしとて木下一人信長の本陣へ参上し朝倉の家中にて相應に刃金をあらはしは前波九郎兵衛冨田弥六郎増井甚内毛谷猪之助當陣へ走入て忠節を盡さんと願ひは勿論彼等ハ朝倉普代の侍まで義景と死を同じくもすべきものなるに主を怨むることのゆゑて對陣中に降参をなすこと近頃無道の至にはべれども又用ふる処もはべれバ召つれ左様の理とて御免ありて彼等をも召出され御對面あるべく其上にて如斯仰付られなバ此度の軍必勝の緒となりなんと言上して秀吉ハ退出を

前波九郎兵衛吉継降参の事北陸道七國志の説大に異之因

て爰に畧鈔を義景去年三月下旬篠尾に鷹鳥を遣ハさと
小高き岡の上にて酒宴をもよほさるゝ時吉継知ざるやありけ
ん乗打をしきを義景怒て勘當せられけるによつて種々と
陳謝なれ共更に許容なく因て元亀三年九月十一日大岳陣
の時白晝に吉継父子駒をはやめて敵陣へ向ひ虎御前山に入
そのゝち四五日を經て冨田弥六郎長秀毛谷猪之助増井甚
内之助三騎打川を敵城へ駈入と云て九郎兵衛吉継後に
桂田播磨守長俊と改越前の守護代として奢侈冨鏡と
極めたりしが天正二年正月十八日毛谷増井のために戰死

重修真書太閤記四編巻之拾七　終

重修真書太閤記四編巻之拾八

虎御前山砦普請の事
并山崎長門守計策の事

越前の勇士前波九郎兵衛吉継冨田彌六郎長秀毛
谷猪之助増井甚内等織田家へ降参し木下が陣に
入しかバ木下本陣へ参上し信長に内意を通じ爾
後四人の輩に向ひ各降参の事信長殊に悦着あり
速に對面あるべしと申さるゝ間本陣へ同伴をべ
しと云によつて四人大に悦び偏に木下殿の御執成
故左様に首尾整ひ申ゆ辱次第と禮謝し即木下に

従ふて本陣ニ至れバ信長早速召出され降参神妙
の至也本領安堵相違あるべからず且越前退治の
こと四人の忠功ニ因処なり本意の上ハ莫大の恩賞
越前ニ於て行るべき由直ニ申渡されけるによ
而四人とも平伏し此度無實の讒ニよつて必死の難
にくりひを御恩ニよつて免されしのミならず左
様ニ仰下さるゝこと難有仕合骨髄ニ徹しハ何様ニ
も忠勤を盡しすべしと辭を揃て申けれバ信長弥
感賞ありて義景の陣中のこと共尋ねありて前波九郎
兵衛承而浅井備前守長政虎御前山の砦普請を迷
惑ニ存じ何卒して是を妨げんと義景に合戦を勧

め爰迄出陣いたされし因て浅井朝倉両勢一同に
打てかゝり御陣ニ向て一戦を挑む筈ニてありし
が浅井ハ不知朝倉ハ某始外三人の者御陣へ駈入
ければ義景臆病なる本性ニハへぞ弥物怖いたし
外々の家來共とも疑ひ彼も前波一味なるらん是ハ
冨田増井の縁者なるらんと心を置て五三日の間ハ
合戦の談義ニ及ぶまじ諸士もまた互ニ疑ひ合軍
のことハ思もよらじ身分の上を兎や角と案ずるぞ
かくてハらへぞ匆々近くハ出陣沙汰あるまじく
ハとやなるらん信長熟聞食實左もあるべし然バ其
虚ニ乘て此方より押寄合戦をなさバ勝利あるべきや

否と宣ふに吉継いはく朝倉の陣かように和合さ
せ候へども押寄て必定御勝利とも申かたく候そ
の故ハ義景疑心ふかき生れ付なれハ諸士その
疑を避んが為に涯分粉骨を盡し働き申べし左ハ
ちぶたとく御勝利候とも兵士の損亡多く候らん
かその上に義景を討取などの御利運ハある申まじ
く殊に浅井長政傍に見ても居申まじく候へど御骨
折などの義有べしとたしかに申上らるゝぞと申け
るにより信長尤の事なりと仰らる然ハ敵の寄来ら
ん時まで味方の兵士休足をとべし其方共ハ木下の
手に屬し働くべしと仰渡されけれバ前波冨田毛

谷増井かしこまりて御請中藤吉郎の組となり秀
吉に從て陣所にかへり越前の國風諸士の剛臆地
利の嶮易をかぞへ一向軍談の外他事なく能衆ハ
容るゝ木下の胸中の廣きに四人とも感服し何に
を大器量の侍大将なると渇仰の首を傾けるが此
時朝倉の陣中にてハ前波以下四人の者を怒れど
も為べき様もなく彼等與同の者もあるべしと諸
士疑ひ内々に吟味をなすべしとて先翌日の合戰ハ延
引しけるにより案の如く諸士いづれも心を置合
て軍をなすべき体ハ見へざりけり明日ハ是非の一戰
と浅井ハ心に定め居けるに朝倉が陣中の騷動に

因て義景出陣延引とや來りしかバ長政大に力を落し張詰し氣も緩ミ砦普請とさまたぐる事も叶ハざれバ無念ながらに打過けるに凡そ日数積りて虎御前の砦全く成就したりけれバ信長本陣を山上へ移されけり横山より此処まで行程三里なりし此間ハ繫ぎ城なくてハかなふまじとて宮部山と八相山と両処に要害を仰付られ宮部山にハ善祥坊八相山にハ番手の人数を籠置れ又虎御前より後の方ハ路次あしき処ありけるをバ道巾三間半にたかくと築立させけり織田家にてハ思のまゝに砦を築き道を修復し繫ぎ城と定めてその威勢ハ

とほど江北に震へども朝倉淺井の輩ハ氣力おとろへ茫然たり朝倉の長臣山崎長門守吉家大岳の本陣に至り義景に申けるハ味方に心變りの者あつて諸勢の心一致せざれバ所詮合戦もなれバ此処に無益の長陣ハ却て禍の基ひなるべくハ又此方より軍をしかけバとも敵方より足だまりの城郭も成就しつなぎ城の手配りも出來しつれバ去年坂本の對陣とハ同じからず日かさなるほど味方に心變りの者多くなりゆきていよいよ難義に及べしはやく軍をかへさせたまハん事肝要なりと勧めけるによりて義景聞て何にも織田の威勢ハ前日に

倍して見ゆるぞや當手の軍勢引帰さんとならばよも安くと引をなすその上我帰國せば淺井一手にてなるべく難渋すべし長政の窮阨を救ん為に出馬をし身が今更に退去せんと世の嘲も口惜しといへども長門守が計にて夫より奇策を思ひ出していふうたとへば我らぞろうり引返さば長政もまた難義をすべけれども信長をも帰陣させなば長政にも満足なるべしそもそも信長は勇氣にはやる大將にて敵と見れば進でやまぬ僻あることなれど信長砦に入て合戦を好まざる様に見うけはされば此方にて陣拂ひして引退と見ば信長も必定引

退くべくはなかりし信長の胸中いかゞとおもはしめさるべけれども忍びよるなれたるものを擇で虎御前山の麓の小屋を燒をて御覧ゆべし信長是非に合戦を持べき心ならばその小屋をやがて拭直すべしもし又燒もしまゝにて修理の体なくばあるらば帰陣遠からじとおぼしめしゆべしと申けるにより義景大に悦び諸士のうちにて上村内藏助竹内三助は

七國志に朝倉出雲守景盛の郎等竹内三助上村内藏助十月十四日大風雨に乗し忍入て小屋を燒しと云

忍びになれしものなれバとて此事を申渡しける
に両人畏て九月廿四日の夜大風雨にまぎれて小
屋のうちへ忍び入夜半ばかりに風表なる小屋へ
火をさしけれバ忽ちもえ上り七百間ばかり只一
時のまに灰燼となる木下藤吉郎かゝるまぎれに
夜討などのあるものぞ用心をすべしと備を立て待
けれども敵一人も寄ざれバ火鎮りて夜明て信長
諸士を集め評定ありけるに木下藤吉郎いはく城
墎をもてに成て此上對陣したまふらんも無益のことなる
べし所詮此度両家を滅したまふことハなるまじく
はへて小屋を掛直さんも費ありてその功なる事

べしはやく横山まで御引取可然ハ横山にて容子
御覧ありて一まづ御帰國あるべきのやハいかんぞ
らん義景にも程なく帰陣と察されハその故ハ
かうと申さば夜前出火のさわぎをよき時節にて
はに朝倉勢さらに打出ざりぬハ能く軍を好まざ
と見へハ然れバ只今御退去ハとても御跡を慕ひ奉
るなどゝ氣遣ハ更にあるまじくハと申けるによ
て信長此義に同したまひ小屋の燒跡の見えざる処
を塀柵にて繕ひさせて虎御前山の砦をバ誰なら守
らせべきと思召さづらはせなひけるに敵城と向ひ
あふたる城のことなり容易く持かるむべうらずと

なのふその多けれバ我なそといふものもなく信長にもわづく持ありつゝひゐひける御氣色を見て木下藤吉郎進ミ出此處より某をさし置れべし越前の者ども寄來りとも君の御出馬ある迄ハ急度相守なるべしと望をけるによつて信長大に御感ありて其方此年月横山城にて骨折もくなかろうぼとに此城に殘り止り守るべしとハ剛勇不敵の大器といふべし去ながら此城を堅固に守るべきものの其方ならではあるまじと某も思ひ寄しなかりし長濱といひ横山といひいづれも大事の処を成る身に虎御前をめと仰出されなく　おぼしめしけるに

よくも望しことよとて信長幾度となく褒美ありて然ハまづ横山迄退去さすべしとて礒野丹波守とめさるゝと當処にとゞまり木下に心を合せよへと仰ふくめられ廿六日の白晝に虎御前山を退去ましゝし横山に入るに三里の間に敵といふもの一人も出合で三万餘人やすくと引取をなしたり

木下藤吉郎虎御前山の城を守る事
并浅井朝倉城攻敗軍の事

朝倉義景ハ家老山崎長門守吉家が計畧にて虎御前山の麓に掛ならべたる織田方の小屋を焼をてさせけるに信長再度小屋を掛んとも せで塀柵で

かゝる故にて信長惣軍をまとめ横山まで退去ありけれども義景大に悦び然ば此方も帰陣をなすべしと用意ありしかども猶信長虎御前山とば引取しかバら近き横山に居るなれバ油断ハなりがたしと容易く陣拂もなさず見合を居ける信長横山にて敵の容子を伺ふに戦を挑む色も見へ給はねバ別条あるまじと思召さ父子とも横山を御立ありて濃州へ還らせ給ふにより義景も今は心安しかれば歸國もなしとて十月三日大岳の陣をはらひ越前へ帰りけるが淺井家へ合力のためとて朝倉式部大輔景鏡に五千餘騎をさし添て江州に止め置

たりけるに長政義景の帰國を本意なしとおもひながら景鏡の五千餘騎と我手勢とを合せ一万餘せめて虎御前山に殘り止る木下藤吉郎を追崩しその競に横山までの川なぎ城を責取べしとてまたまた軍の評定をなしたりけり木下藤吉郎は大膽不敵の侍なれバこちづりの勢にて淺井朝倉の一万餘騎を敵として少しも恐るゝ色なく相守りの礒野とらしめ川なぎの城の者迫をな是淺井の侍ほくその比降参の者なれば頼もしからぬものなれど藤吉郎もとしもうるさがらば是を以て手足腹心のごとく取なつかひけるにより不思議の良将な

り然るに十月十六日浅井長政三千餘騎にて先陣に進ミ朝倉景鏡五千餘騎にて搦手を心がけ虎御前山におし寄たり秀吉もとより屈せず五色の吹貫を山風になびかせ先年稲葉山の城責の時より吉例として御免ありし瓢箪の馬印をおし立たり但しはじめハ一ツなりし瓢箪を城一ツ落る度ごとに一ツヽふやさんと誓ひしが今ハ十五六にもなりけるとぞまことにゆゝしき馬印なりその蔭に加藤福島片桐堀尾蜂須賀の輩馬の頭を引立て備へたり元より木下が軍法なれバ防げ逃るを追ふと定め置ければ城より打て出れバ只兵氣凜々と松の嵐に伴ひて實も虎御前の山の名に相應し騰龍が雲に游べる風勢にてよそをさまじく見へたりけるを浅井朝倉両家の兵士ら味方の大勢なるを頼みにし無二無三に責かゝり短兵急に乗破んとさしも嶮しき坂道を上れども城中更に音もせず既に山の半腹過て昇りし頃大将秀吉合圖とおぼしく鉄炮一發うたせしかバ塀のさざまより弓鉄炮を雨霰の如く射出し打出し防ぎけれバ櫓の上よりも大木大石を投落しけるをおびたゞしく寄手思ひあなどりて深々と進みしところなれバ無下にちかくしてあだ矢もなく高き処よりなぐる木石なれバ人に

を馬にも川にて當りけるにより寄手多くうたれ
て色めく処を大将秀吉見すましてそりや打出追
散せと合圖のさいをひらめかせば待まうけたる
加藤福島城戸を開て突て出面もふらず駈立るに
より只今大木大石に打ひしやまされし寄手一支も
さゝへずさしもけはしき坂道を忽ち麓へ追落さ
れて手負討死その数ありけれども味方は一人を
過たず浅井朝倉が後陣の勢入替らんと進めども
先陣のうけ崩されて落來るに遮られて昇ることを得ず
とかくする内に櫓より秀吉小旗をあげて味方を
招けばいづれも敵を追棄にして手ばやく城中へ

引返し城戸をさし固めて音をせず長政景鏡大きに
にあきれ敵はわづかに千餘人なるべし味方八倍
の人数なり掌にのせてなぐるとも何のかゝさと
かあらん今度は楯を真向にかざし能々責支
度してのち攻上り一同に力をつくして只一揉に
もみ落せとそけましけれ共越前勢さらばとて間
ばかり江北の侍も跡よりさゝのりて我真先に駈ん
と勇むのものなし長政景鏡さすがに氣をいらち
乗廻しく下知すれども更におそるべき様なくかくて
は如何になりゆくともその詮あるべからずとて両将小
谷へ引かへしけるを見て木下が勢ども追打せん

と勇しけるを秀吉難く制して追しめば敗軍とは
いへ敵は大勢なり窮鼠なを猫をかむといふにあ
らずや長政は土地の主将者なり景鏡は越前の勇
士なりかくの窮鼠にあらば危ふしくこの城に
をまあさまなれども要害よければ待て戦ふには何
万騎にてもおそるゝにたらず小利を見て大損を
とるなかれと厳重に禁じて止めさせけり前波九
郎兵衛富田彌六郎毛谷猪之助増井甚内四人は當
城にありて木下が人数を引廻をさて手足を動さず
似て進退自由なること言語に絶せり誠に奇代の勇
将かなと心の内に感じ何様信長の軍威さかんに

領國と日くに廣げなんも斷やと舌を振ふてぞ
居たりける長政景鏡は小谷に帰りさても今日大
勢にて推寄なから仕出したることもなく味方には
手負討死あれども敵とては一人も討得ざること軍の
習とは言ながら口惜き次第なりと憤れば景鏡も
たまく加勢に殘りし身がかくの如くの仕合はか
にも面目なし所ら越前より此の城へうけ入し
四人のものの乃思ふんもそぶかしく今一度おし寄
は討死せんと定めけるに長政の侍に淺井七郎と
云もの進み出て申けるは虎御前山も要害よくぞ

の上木下藤吉郎ごとくの侍にあらば急にせむるな
とも二日三日に落さんことまされ難かるべしその
うちには信長聞つけ出陣あるべし因て愚案を廻
らし虎御前とば打出て宮部八相山両処の砦を
責取て横山との通路を断切りそののちに虎御前を
責ばいかで容易く勝利を得べけんと勧めければ何
も此議に一同し長政にも今度は手勢を振て一万
五千餘騎景鏡の勢と合せて二万餘騎小谷を立て
宮部の城へと押寄る宮部の城主善祥坊手勢わづ
かに五百餘騎信長よりの加勢は三百餘人彼是
合せて八百餘人淺井朝倉の勢にくらべては實に

對揚をなすべきにあらねども善祥坊さる剛の者なれ
ばいちとも驚く氣色なく軍の習大勢にて攻て
も落し得ぬ城もあり小勢にて城に籠も大軍を引
受るもしく寄手を追しりぞけ終に運を開きしため
しもあり楠が千早金剛山楠一人猛かりしば千早金
剛山なればこそ要害さまでよろしからねば八百餘人
が楠とおのれべし寄手わづかに二万餘騎千早の
寄手八十万騎にくらべてはまことに物のかずならず
ば面々の武勇をあらはすは今日なるにさだまりし
て木下に笑はるなと勇めしかば今まで浮ぬ兵士
どもも俄に氣力を引たてていかにも我等が手柄を

後代に残し名を天下にあぐべき軍なりなりしに
きたなきふるまひすべきと力脚を踏たて踏々と
小をどりし持場々々を受取て寄手おそしと待
けるに虎御前山よりハ浅井朝倉の旗の手の宮部
山へむかふを見て援兵せでハ叶ふまじと用意し
けるを見て前波冨田毛谷増井の輩進ミ出敵ハあ
の如く大勢なるに小勢を以て大将の打出なさん
こと然るべからずと覺へハ木下殿にハあの城に止
らせたまふべし後援にハ我々四人罷向ひ申べしと
申けるを秀吉聞て四人衆の志のほどハかんじけ
れど去るべからずとての約束なれバ秀吉むかふて

かゝるひがごとをしてハ横山と當城との間にて大事の
宮部の砦なり是を敵にとられてハ味方の難義云
べうもなし誰々面々を某と一緒に出陣ありて
斯々なして給はれやと一川の謀を示し合せ専後
援の手配をなしたりけり
虎御前山の合戰織田家譜にハ十一月のこととす
朝倉家記によれバ義景十二月三日に一乗谷へ
帰りしと云然るときハ十一月の事とするを是
とす又信長の横山を立て岐阜へ帰る日次も或
ハ十月十六日と云説あり共にその詳かなることを
知らず

重修真書太閤記四編巻之十八　終